

イザヤ書9章6-7節 「思いを超えた助言」

1A 肉体を取られる神

2A 肩にある主権

1B 不思議な助言者

2B 力ある神

3B 永遠の父

4B 平和の君

3A 平和の統治

本文

私たちは、クリスマスを預言したイザヤの言葉を読みたいと思います。

6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

私たちは、クリスマスの時期に近づきますと、礼拝に通っているクリスチャンが1パーセント未満と言われているこの日本でも、主イエス・キリストの降誕をほめたたえる讚美歌があちらこちらから聞こえてきます。教会の外に出れば、これまでは全くイエス・キリストとは無縁の日常世界が広がっていてもこの時期だけは、どこでもイエス様をほめたたえているという不思議な感覚に襲われます。そして、不思議にこの時期には人々の心が少しだけ寛容になります。誰かに何かをしたい、とか、非日常の出来事があってもそれを快く受け止める心の広さがあるような気がします。

私たちは、対立の時代に生きています。国と国の対立、民族と民族の対立もあれば、家族における対立、職場の中での対立など、これまで仲間だと思っていた者たちの中での分裂があります。このような緊張の中に生きていくと、人々の心がすさんでいきます。閉塞的になります。多くの人が自分の世界の中にこもっていきます。そして、必要がないのに心を忙しくさせ、駆り立てられるように生きています。その日常に、非日常が入ってくる場合があります。

例えば、人の死があります。時に人の死は癒しをもたらし、平和をもたらします。なぜなら、人の命や死という根源的な部分、私たちが生きていることそのものに直面する時に、私たちが持っている違いや対立がそれほど大事なものではないことを知るからです。けれども、人の誕生も同じ効果があります。その赤ん坊を見る時に、私たちは自分が置き去りにしていた大切なこと、価値ある

ことをはたと思い出します。クリスマスは、キリストのミサです。ミサは礼拝することですが、具体的にはイエス・キリストがご降誕されたことを記念して、この方を礼拝します。

1A 肉体を取られる神

先ほど読んだ箇所は、紀元前 734 年から、ユダにアハズという王がいた時に、預言者イザヤに与えられた数々の預言の中の一つです。時は、アッシリヤという大国がパレスチナの地域にどんどん勢力を増していった時のことです。これまでこの地域にある諸国が対立していたところ、メソポタミア地方からのこの巨大な国に対抗するため、軍事的な連合を組む動きが起こってきて騒がしくなってきました。そして、北イスラエルとシリヤが連合しました。そして南のユダをも一つにして戦おうとしたのです。そこで北イスラエルとシリヤは、ユダを攻めに行きました。そして、また攻めようとしていたところ、預言者イザヤがアハズのところに行き、自分の幼い男の子を連れて行って、「そのようなことは起こらない。神が共におられるからだ。」と預言しました。

そしてイザヤは、正義と平和をもって世界を治め、このような国々の争いをやめさせる王がダビデの王座から現れると預言したのです。「主みずから、あなたがたに一つのしるしを与える。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。(7:14)」インマヌエルとは、神が共におられるという意味です。神が共におられることを表すために、男と女の夫婦の関係、性行為によって生まれる子ではなく、処女から生まれると宣言しました。赤ん坊なのですが、その子は神ご自身による子であり、神ご自身であられます。その子を見る時、確かに人の子なのですが、神の御子でもあられるのです。

そしてイザヤは改めて、この偉大な約束を告げます。それが今読んだ、9 章 6-7 節でした。6 節を見てください、「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」ひとりの嬰兒、小さな赤ちゃんです。けれども、この方は神の御子として与えられます。ここで「男の子」と訳されていますが、単に「子」と訳せばよいでしょう。「独り子が、私たちに与えられる」と訳しても良い言葉です。次に出てくる名が、ことごとく神のみに属する性質が出てきます。ひとりの嬰兒が、神の御子であるのだというのがここでの預言なのです。天地を創造された神である方が、その独り子を人の赤ん坊として私たちに与えられた、という意味なのです。

2A 肩にある主権

ですから、神が人としてお生まれになります。そして、この方がイスラエルのベツレヘムで生まれ、ナザレという村で育ったイエス様であられます。だから、私たちにとって、世界にとってイエスこそが平和をもたらす方であられ、私たちに平和と救いをもたらしてください。

1B 不思議な助言者

多くの方が、平和、平和と言って叫んでいます。けれども、聖書では平和は、自分の権利や主張を通すのではなくて、いっさいの主権がこの方にかかっているのだ、ということを確認するところか

ら始まります。「主権はこの方にあり」とあります。自分の意見、自分の経験、自分の主張、自己実現など、すべてが自分の方に主権があるのです。いいえ、二千年前にお生まれになったイエスに神は主権を置かれました。この方に自分の主権を移譲する時から、私たちには平和が訪れます。

いろいろな名でこの方は呼ばれます。一つは、「不思議な助言者」です。まず、「不思議」という言葉に注目しましょう。このヘブル語「ペレ」は、「奇しいこと、驚くべきこと」という意味です。人の考えに及ばないこと、ということです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。(1コリント 2:9)」ですから、不思議という言葉が聖書で使われる時は、人ではなく、神にのみ使われます。

考えてみてください、この地球と宇宙を造られた方が赤ん坊としてお生まれになり、人の形を取られたことだけでも、あまりにも及びもつかないことです。私たちキリスト者は、すばらしい知らせをどうにかして伝えたいと願います。そこであらゆる知恵を用いて、周囲の人々に分かってもらおうとします。けれども、自然には決して受け入れられるものではないのです。あまりにも私たちの思いを超えたものであり、主の慈しみによる働きかけがなければ、人は決してイエスに近づくことはできません。

その驚くべき御業をもって私たちに助言されるのが、イエス・キリストです。英語では、ここは「ワンダフル・カウンセラー”Wonderful Counselor”」となっています。「すばらしいカウンセラー」と英語の聖書を日本語に訳すこともできます。確かに、主はすばらしいカウンセリングをしてくださいます。けれども、多くの人は、自分に最善をもたらすこの助言に耳を傾けず、自分に災いをもたらしています。

私たちは常に、何らかの助言を受けながら生きています。自分独自の考えで生きていると言っても、実はそれは他の誰かの助言あるいは意見である場合が全てです。詩篇第一篇には、悪者の助言ではなく、主の言葉によって生きる人の姿が描かれています。「幸いなことよ。悪者のはかりごとには歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。(詩篇 1:1-3)」この「はかりごと」というのが、カウンセリング、助言のことです。人を駄目にしてしまう助言が世には満ちています。その中で、地中に埋まった宝のように知恵を見出すことができれば、幸いです。

助言、アドバイス、カウンセリングというものを、私たちは「自分の話を聞いてくれる」というものに摩りかえています。そして自分の考えや感じていることに同意してくれないのであれば、そのカウンセラーはどうしようもない人だと言って、去っていきます。助言、神からの助言はいまお話ししましたように、自分の考えを真っ向から否定することもあるのです。いや、自分の今までのあり方を

正すことなくして、どうして平和の道を歩みだすことができるでしょうか？

イエス様の助言を読みます。「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。(黙示 3:18-19)」忠告するという言葉が、助言、カウンセリングです。イエス様の助言は、火で精錬された金、自分が裸であることを隠すための白い衣、目が見えるようになるための目薬なのです。そして、愛による叱責であり、懲らしめであります。そして悔い改めによって平安が与えられます。

2B 力ある神

そしてこの方は「力ある神」です。指導者を立てて、引きずり降ろすことのできる力をもった神です。この天地万物を一瞬にして瓦解させることのできる神です。この方が、マリヤの胸に抱かれています。

3B 永遠の父

そして、なんとこの方が「永遠の父」と呼ばれています。イエス様は、何度もご自身と父なる神を同等の方とされました。「わたしと父とは一つです。(ヨハネ 10:30)」そして十字架に付けられる前の夜、弟子ピリポが尋ねました。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」イエス様は言われました。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。(ヨハネ 14:8,9)」イエス様を見たら、父なる神を見たのです。

この父なる神が「永遠の父」と呼ばれていることに注目してください。もし、皆さんの中に次のことがはっきりしたら、次の質問に明確に答えを得ているとしたら、全き平安を得ます。自分が求めている満足、平安、充足、理解、これらのものがすべて与えられます。過去、現在、未来についての質問です。

一つは、「自分はどこから来たのか」であります。なぜ、自分は生まれたのか？という問いであります。ヨブという人は、「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。(1:21)」私たちは世に誕生してから、いろいろな洋服を来ておめかしをして外出するように、いろいろなものを身につけて人の前に出ていきます。けれども、それはありのままの自分ではないのでいつか崩れます。自分がどこから来たのか、これを知れば自ずと今、あるものの存在意義が分かります。今、ここに自分がいることの意味がわかります。

もう一つは、「自分はどこに行くのか」です。これは未来のことです。死んで終わりだと私たちは思いこんでいます。あるいは漠然と、何かどこかの世界に行くのか、と思っています。けれども、は

っきりしていないので、何の目的や目標をもって生きていけばよいか分からないのです。そしてもう一つは、「なぜ、今、生きているのか？」であります。現在の自分です。

この三つを知るためには、永遠を知らないといけません。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。(伝道者 3:11)」今、食べて生きていく動物とは違って、私たち人間には永遠への思いが与えられています。自分が生まれるのは、もちろん母親の胎からです。けれども、母親が自分を造ったのではありません。誰なのか？それが、あなたを造られた神なのです。あなたは、神によって造られたのです。このことが分かれば、すべての理由が与えられます。そして世界も神によって造られました。「初めに、神は天と地を創造された。」この世界が神のために存在しているのです。

そしてもう一つ、死んだ後どうなるのか？「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように(ヘブル 9:27)」死んだ後に、必ず裁きがあります。生きている時に行ってきたすべての事柄を清算する時があります。会社で評定という制度があると聞いていますが、人の評定は限界があります。誰にも知られなかったこと、その隠れたことをすべて含めて、神の前で裁かれるのです。だから、この裁きにおける私たちの負い目を担うために、キリストが十字架で処罰を受けてくださり、それによって神の前に大胆にでていくことができるようにしてくださいました。

このことが分かれば、自分は神という目標の中で生きることなのだ、と分かります。これは、世から離れて世捨て人のようになれ、ということではありません。スポーツ選手にもクリスチャンがいます。サッカーなどで、ゴールにボールを入れた後に祈りを捧げる人がいるでしょう。その人にとって、点数が一番ではないのです。神に栄光を帰することが全てなのです。それは、将来、この方から報いを受けることを知っているからです。

そして今、主が自分を支えてくださっています。「わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしがらになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。(イザヤ 46:3-4)」自分が人生という重荷を負って、自分の人生を運んでいく疲れる生活ではなく、背負ってくださり、運んでくださる方がおられます。

永遠についての過去、現在、そして未来をはっきりと知れば、今の私は大胆に、「私は今、生きています。私は満足し、全き平安をもっています。」と確信をもって告げることができるのです。このことを言わせてくださる方がキリストです。使徒パウロは、「あなたがたは、キリストにあって満ち満ちて(完全)なのです。(コロサイ 2:10)」と言いました。

4B 平和の君

そして最後の呼び名が「平和の君」です。先ほども話したように、私たち人間は平和を求めますが、平和の君を求めようとしません。自分が主権を持ちたいと思っている限り、自分の欲求、自分の願望と、自分の主張だけが前面に出るために平和は来ません。自分の主権を、平和の神に移譲しなければいけないのです。

3A 平和の統治

そしてイザヤ書 9 章 7 節を読んでください。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。」限らない平和が、この方が世界を治めることによって訪れます。

平和について、イエス様は対立を避ける形でもたらずことはありません。「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。(マタイ 10:34)」剣をもたらず、と言っています。私たちが思いつく平和とは、まったく異なる形で、驚くような形で与えられます。

それは、私たちの心にある戦う心、自分を主張し、自分を追及したいその心を切り取る剣として来られます。自分が欲しがることが与えられないので、それを得ようと必死になるその願望を、イエス様は取り除かれます。十字架につけられたキリストは、私たちの心を突き刺します。そこには、私というもの、自己にある罪の一切が付けられているからです。このキリストを仰ぎ見る時に、私たちはただ、キリストの前にひれ伏して、自分の心に主となって入ってきてくださることを願うのです。そして、自分というのが実は平和を妨げる最大の敵であったことに気づくのです。

だから真の平和をもたらすために、イエス様は剣を持ってこられます。そして、この世界も悪くなっています。イエス様は再び来られます。口からの剣をもってこられますが、それは世界が争っている、世界が不正を行っている、世界が神に逆らっているその反逆に終止符を打つために戦われるのです。そして、ここに書いてあるように恒久の平和を地上にもたらししてください。

それゆえに、私たちは赤子のイエス様に目を留めるのです。自分というものが前面に出ている時、この方を眺めて恥ずかしくなるのです。主が与えようとされているのは、私たちがへりくだり、主に自分を変えていただくよう恋願い、そして碎かれて、柔和な者とさせていただくことにあります。